

氏名	野本 堯希
学位の種類	博士（コーチング学）
学位記番号	博甲第 10413 号
学位授与年月	令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	野球の打撃における個人戦術の実践知の構造

主査	筑波大学教授 博士（工学）	浅井 武
副査	筑波大学准教授	川村 卓
副査	筑波大学教授 博士（コーチング学）	會田 宏
副査	筑波大学教授 博士（教育学）	木内 敦詞

論文の内容の要旨

野本氏の博士學位論文は、野球の打撃における個人戦術の実践知の構造化を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

著者は、野球競技の打撃における個人戦術の実践知の構造を明らかにすることにより、個人戦術力の向上に寄与する知見を得ることを目的に本研究を行っている。この目的を達成するために、《研究課題Ⅰ》打撃熟練者の打撃における個人戦術の実践知モデルを生成することにより、打撃熟練者がもつ実践知の構造を明らかにすること、及び、《研究課題Ⅱ》これから打撃熟練者を目指す選手がどのように実践知を獲得しているのかについての事例を得ることにより、研究課題Ⅰで生成する打撃における個人戦術の実践知モデルの実践現場での活用の妥当性を検討すること、の 2 つの研究課題を設定している。

《研究課題Ⅰ》では社会人野球トップレベルの打者 7 名を対象にゲーム前の準備段階からゲーム中の打席内外での行為に関してインタビュー調査を行った。著者は、得られた語りをインタビューデータからボトムアップにモデルを構築することに適した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、12 個の概念、4 個のカテゴリーから成る、打撃における個人戦術の実践知モデルを生成している。その中で著者は、1) 打撃における個人戦術の実践知モデルは、【対戦イメージの形成】、【対戦イメージの更新】、【戦術の選択】、【打撃観の形成】の 4 つのカテゴリーで構成されている、2) 打撃熟練者は、個々の選手がもつ技術の可変幅の特徴に応じた“対応の幅がある基本戦術”をもち打席に臨むことで、結果的に戦術思考にかかる負担を軽減させている、3) 打撃熟練者は、ゲームで個人戦術を実行するという目的のための手段としての技術力を選択的に獲得している、4) 打撃熟練者は、過去の打席経験から得た学びに基づきゲーム中の情報を捉えることにより、当該ゲームにおいて最適な【戦術の選択】を導くための【対戦イメージの更新】を行うことを可能にしている、5) 打撃熟練者は、一球毎の投手との対戦経験を起点にした投球間、打席後、ゲーム後の省察をゲームに出場する度に繰り返し行うことで、個人戦術の実践知を発展させている、の 5 項目の実践知を示している。

《研究課題Ⅱ》では、大学生野球選手 1 名を対象にリーグ戦期間中のゲーム前・中・後における個人戦術の実践知に関するインタビュー調査を実施し、経験と省察に着目して分析を行っている。その中で著者は、1) 選手自身が想定していた個人戦術力をゲームで発揮できないという経験を通じて、技術の変化への気づき、原因の査定、修正方法の選択といった安定した技術力を発揮するために求められる一連

のプロセスの必要性を自覚していた、2) これまでに対戦したことのない個人戦術をもつ投手との対戦経験を通じて、新たな戦術のバリエーションとその実行のための技術力の獲得を志向していた、3) 新たな戦術のバリエーションの獲得を目指す経験を通じて、新たに獲得を目指す戦術を実行するために有用な情報を獲得する必要性を自覚していた、4) 陥りやすい失敗例証を収集し、そこから得た教訓を次のプレー機会で活用するといった経験を通じて、状況の変化に富むゲーム中即時に【対戦イメージの更新】ができるよう志向していた、5) 本事例からは、打撃における個人戦術の実践知モデルを構成する 12 個の概念の内、11 個の項目に該当する語りが得られていた、の 5 項目を明らかにしている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、野球の打撃における個人戦術力の構造を考察したものである。その中で著者は、経験則で語られがちな打撃の個人戦術について、個々の事例の妥当性を学術的立場から検討し、モデル化によってその構造を明らかにしている。また、12 個の概念、4 個のカテゴリーからなる個人の戦術力を得るための実践知モデルの作成には、妥当な質的研究方法が適用されていると考えられる。さらに、自分の技術と対戦相手を正しく評価することで、自分の技術の変化幅や特徴を理解しておくという概念は、他の競技にも応用可能な考え方であると評価できる。加えて、そのモデルを使った事例研究において、著者は個人戦術の自己による成長のために普段の練習で、試合戦術と技術課題を合わせていくことが重要であり、そのためにデータの活用や他者からの評価を積極的に受けることを提言しており、これらは具体的な方略として基本戦術力向上の方法となり得る点も高く評価できる。

これらの研究成果は、当該分野において高い評価を得ている学術誌に掲載されており、著者の今後の研究上の活躍が大いに期待できる。

令和 4 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。